

(表紙)

「人の一生

祝儀控帳

深井家

はじめに

『お七夜祝儀控』『紐直祝儀控』『結婚披露祝儀控』等は人の一生に関わる文章で、人生の節目ごとに行われた儀礼を祝って、親類・村人から贈られたお祝いの品や祝いの記録です。

収録した記録は『寛政六年(一七九四)お美恵(当家五代目の長女)紐直祝儀控』から平成元年(一九八七)真理子(当家十代目の長女)結婚披露祝儀控』までの三十六冊で約二百年間の記録です。

こうした儀礼は、古くからおこなわれていたようですが、寛政以前の記録は見あたりませんでした。

お祝いには、産着や布地のほか半紙・麻・苧(からむし)・鯉節・するめ・砂糖などが贈られていることが注目されます。

江戸時代の貨幣の表示は両・分(ぶ)・朱・疋(ひき)・文(もん)などでそれに祝儀・不祝儀の使い方があってややこしく、一文は計算の仕方で多少の相違があります。現在の十五円位に相当します。

なお、本編の随所に参考として儀礼の由来を記しました。

天和年中(一六八一〜八三)に初代伊右衛門が百間村川島(宮代町)の五左衛門家から清地村(杉戸町)へ分家して、二代目浅右衛門が享保中期(一七一六〜三五)頃旗本五千石酒井安房守家の割元名主(数ヶ村に年貢を割り当てること)をまかされた名主となり以後、「一新まで世襲し、明治期には戸長をつとめました。

目次

近世

文化七年おてるお七夜祝儀控

お七夜

文化九年磯五郎お七夜祝儀控

お宮参り

文化十二年喜司お七夜祝儀控

天保九年おさわお七夜祝儀控

天保七年伊助初着控

寛政六年お美恵紐直祝儀控

お食い初め

文化十二年おてる紐直祝儀控

文政三年喜司紐直祝儀控

嘉永六年おぬい紐解祝儀控

七五三の振る舞い

七五三の宮参り

産育

おてる婚礼祝儀控

雛祭り

天保三年喜治婚礼祝儀控

端午の節句

慶応三年おぬい婚礼祝儀控

成人式

明治

明治十年おいち祝賀聘礼大豊恵

明治十四年浅右衛門お七夜祝

仲人

蕎麦とうどんの値段

明治十四年浅右衛門端午祝覚

結納・お色直し

明治十六年伊左右治初ノ節句

〃 二十九年出産見舞(堀口義一)

〃 三十八年伊左雄出産見舞控

〃 四十一年春枝出産見舞控

綿帽子

嫁入り

明治十四年伊智紐解祝儀帳

〃 五年兵治祝儀(婚礼)控

〃 二十八年伊智祝儀(婚礼)控

〃 三十七年伊左右治結婚披露控

江戸時代の貨幣制度

大正

大正七年伊左武出産見舞控

昭和

昭和二十九年真理子出産見舞控

〃 三十一年哲夫出産見舞控

〃 五十九年むつみ誕生諸祝控

〃 六十二年智之誕生諸祝控

昭和三十六年真理子・哲夫七五三祝

〃 六十二年むつみ三才の祝

〃 十三年伊左武入宮控帳

〃 二十八年滋男結婚披露控

〃 二十九年百合子婚礼祝儀控

〃 五十四年哲夫結婚披露控

平成

平成元年真理子結婚披露控

(表紙)

明治十四年

伊智紐解祝帳

十二月二十五日

六才

目出たく

はじめ

半紙

あさ

一金巻円也

井上直五郎

一 金五拾銭 伏見屋久五郎

紙二状 一 五升

あさ 井上常八

一 金式拾銭 大沢幸三郎 一 式升 佐藤太右衛門

紙二状 一 井上直五郎

あさ 一 井上直五郎

一 金四銭 弥助 一 濱田庄吉

半式状 一 濱田庄吉

末広 一 佐藤又吉

一 黄八丈壹反 小右衛門村 一 当村 佐藤又吉

紙二状 秋葉豊次郎 一 井上傳次郎

あさ 粕壁 一 井上傳次郎

一 壹円也 橋本吉兵衛 一 武井七平

半二状 一 武井七平

あさ 一 鈴木元益

一 絹つむぎ壹反 鈴木元益 一 柚ノ木

半二状 一 深井又蔵

あさ 新町 一 高橋文吉

一 金式十銭 たか 一 深井喜十郎

あさ 一 亀吉

一 武田政次郎

関根藤蔵

全一義助

大作浅蔵

濱田清左衛門

粕壁 橋本吉兵衛

八丁目 国井清蔵

一 三升 白石重郎兵衛 一 式升 斎藤平左衛門

一 三升 小右衛門 秋葉豊次郎

一 三升 白石重郎兵衛

備餅くぱり

一 壺升

油三

寺山豊松

木村重五郎

藤森政四郎

平沢長二郎

杉戸横町

小嶋緑四郎

〃 おきん

新町

ふじ仙

当村

松永屋

高嶋千吉

附木屋

斎藤定右衛門

市川清八

武井久八

木村和三郎

ばゝ

店

大作徳次郎

善兵衛

横町

岩吉

粉世

新町

おたか

おかく

ぶん

細谷米十郎

中妻

はたや

おまち

惣吉

仕立屋与惣吉

おいち

やまに

五升

〃

三升

四軒

二升

八軒

壺升五合

三軒

明神

寺

餅米

小豆

一 銀四拾銭

(裏表紙)

「 清地

深井兵治

中妻

はたや

おまち

惣吉

仕立屋与惣吉

おいち

やまに

壺石五斗

八升

きね

四本

(表紙)

明治五年

兵治祝儀(婚礼)控

申霜月吉日

一	半紙二	大鮎や	一	三百文	井桁や
	扇子箱	平治郎		半紙二	平蔵
	弍朱	前		あさ	
一	半紙二	久兵衛	一	二朱	
	あさ	伏見屋		半弍状	木村屋
	天保三	久五郎		あさ	重治郎
一	半紙二	釜や	一	三百文	大工
	あさ	平右衛門		半紙弍状	市五郎
一	半紙二	川通り		あさ	
	あさ	和泉屋		末広箱	
	二朱	音蔵		金老朱也	べにや
一	半紙二	綿や	一	半弍状	政五郎
	あさ	治平		あさ	市のや
	二朱	新町		金弍朱也	清蔵
一	半紙二	お辰	一	半紙弍状	伊勢屋
	あさ			あさ	太右衛門殿
				金百疋	杉戸宿
				半紙弍状	問屋
				あさ	久兵衛
				金弍朱也	市川節堂
				半弍状	武井久八
				五百文	
				あさ	
				半紙壹状	こよ

一 半紙貳状

梅鉢屋

はじめ

あさ

喜十郎

一 金貳百疋

一 半紙貳状

肴屋

一 金拾銭

後藤佐一

あさ

善平

一 半紙二

一 式百文

一 鯉壹本

栃木屋

一 金拾銭

大作徳二郎

一 半紙二

万吉

一 半紙二

あさ

杉戸新町

一 金拾銭

一 壹分

富士や

一 半紙二

青木源八

一 半紙二

仙蔵

一 半紙二

あさ

かまや

一 金拾銭

一 壹朱也

定右衛門

一 半紙二

濱田関右衛門

(表紙)

明治二十八年

一 金貳拾銭

深井礼助

伊智祝儀(婚礼)

一 金拾銭

小島禄四郎

四月十二日

一 金拾五銭

国井初五郎

深井

一 半紙二

高橋久五郎

記

一 金四拾銭

佐藤亦吉

目出度

一 半紙二

あさ

一 金五拾銭 井上直次郎

半紙二 一 三拾弍銭 太白五百目

末広 ますや払

一 金五拾銭 鈴木元益

半紙二 一 六拾銭 国田屋由蔵払

末広 芋代

一 金一円 井上万吉

半紙二 一 七拾七銭五厘 ほし物

一 金二拾五銭 深井喜次 一 弍円二拾五銭四厘 藤蔵払

半紙二 さかな代

あさ 大作徳蔵払

外二 人力車代

金五拾銭 堀口 樽代 一 拾弍銭 くわし代

金四拾五円

一 拾銭 伏久払 一 弍拾五銭 十二日

一 一円二十四銭 梅喜払 一 弍拾五銭 十三日

一 拾銭五厘 油佐一払 一 五拾五銭 十三日

一 二拾弍銭五厘 としまや 一 拾五銭 三人

一 九拾銭九厘 酒代払 一 三拾銭 みやげ

一 六銭 加藤寅吉 一 弍拾五銭 手拭

一 弍拾七銭 国田屋払

三〇目

八ツ

半紙二
麻

十四日

深井こう

一 式拾四銭

ほしうどん代

一 金三拾銭

藤森三蔵

一 四拾銭

祝儀
車二人

一 金五拾銭
半紙二
麻

濱田関右衛門

一 式円十四銭八厘

大作徳蔵
さかな代

一 金五拾銭
半紙二
麻

高橋久五郎

(表紙)

「 明治二十七年

かすかべ

橋本吉兵衛

目出度控

伊左右治結婚披露

東京

伊藤平蔵

山本知貞

十二月二十五日

一 砂糖袋
三拾銭位

目出度

はじめ

一 半紙五
しら賀

後藤佐市

一 金式拾銭

大作徳一郎

一 金式拾銭
半紙二
しら賀

一	金三円五拾銭	酒半樽
一	金貳円九拾五銭	としまや 酒小半樽
一	金貳円八銭	濱田関右衛門 うどん代
一	金四拾壹円 七銭八厘	八百竹 青物代
一	金四拾三銭五厘	和泉屋 料理代
一	金壹円	茶菓子
一	壹円五十銭	和泉屋 女中三人分
一	金拾銭	たい松代
一	金八拾銭	祝儀
一	金壹円	なつ 膳部代

一	金四拾銭	引物代
一	金貳拾銭	二人分
一	計金六拾壹円	火の番人 祝儀

貳拾銭八厘

江戸時代の貨幣制度

貨幣制度は東西に分けられる。西は大坂を中心とした銀貨で、これは対外貿易には欠くことのできない重要性を持っていた。使用するときは重さを計り、その重さが貨幣価値を表す秤量貨幣である。東は江戸を中心とした金貨で一両は四分、一分は四朱の単位で数えられる。一定の重さに作られた計数貨幣である。

この二大貨幣の対立は古く産銀地が西に、産金地が東に偏っていたことも原因の一つとされる。東西の境界線は大略名古屋である。

ところで金・銀貨は取引額の上では中以上の取引に使われる建前のものであり、一般大衆用の日常通貨には不向きであった。それで昔からあった銭制度を整理して、これを統一した。これが一枚一文の計数貨幣である。

但しこれが九六百制といって、九六文を錢縉(さし)に通してまとめ百文に通用するならわしであった。

しかも金貨・銀貨・銭の三貨が併立であり、ほかに祝儀、不祝儀の使い方などがあ

つて、大へんややくしい。

(表紙)

「 大正七年

伊左武出産見舞控帳

九月二十五日生

目出度初

- 一 鈴木
- 一 ぶんねる
- 一 一丈
- 一 かんぴよう
- 一 白砂糖
- 一 白砂糖
- 一 しんもうす六尺
- 一 白砂糖
- 一 ぼうしにむながけ
- 一 きじま一丈
- 一 かしおり
- 一 ゆうぜん形半反
- 一 せんばこかすり一丈
- 一 二十銭

- 堤郷
- 片野
- 深井なつ
- 後藤和助
- 深井礼助
- 鶴巻吉五郎
- 高橋久五郎
- 藤倉キク
- 米屋
- 濱田
- 群馬県
- 堀口
- 山本
- 川島
- 深井

一 もち

一 三百

一 ぶん八尺

一 白砂糖

一 三盆

一 白砂糖

一 中綿三枚

一 一枚十銭位

一 五拾銭

一 ふたごがすり八尺

一 白砂糖

一 乾瓢

三本木

鈴木長作

○ 大作

○ 藤森三蔵

○ 高橋要七

中須

○ 深井

○ 石田清

○ 紅屋

○ 井上直吉

○ 井上

○ 国井初太郎

○ 折原さい

滋勇

大正十二年

四月三十日生

百合子

大正十四年

八月十日生

春枝結婚披露

祝儀控

昭和五年

十一月吉日

(これらの記録未発見)

一 大旗
一 大旗

堀口貞三
高橋久五郎
高橋音蔵
藤森三蔵
大塚良助
平沢富一郎
鳥海茂敏
堀江福治
曷川義光
深井喜一
深井光蔵
井上直吉
山本秀雄
深井吉蔵
高橋圭蔵

(表紙)

昭和十三年

十一月三十日出発

十二月一日入営

伊左武入営控帳

並外地勤務

昭和十五年五月五日動員発令

昭和十五年六月 日出 発

深井氏

杉戸町規約ニ依リ旗ハ大旗三本中旗五本
以下ニ定ム

深井伊左武

餞別

甲種合格

昭和十三年十二月一日午前九時近衛歩兵第二聯隊へ入営前日(十二月二十日)午後一時十六分杉戸駅発ニテ出発ス

記

一 大旗

鈴木まち

一金五円
一金弐円
一金弐円
一金弐円
一金弐円
一金弐円
一金弐円
一金弐円
一金弐円

深井喜一
星野絹子
井上直吉
佐藤竜
深井モヨ
尾花義之助
深井きみ
大高ふさ

一 金五円 深井光蔵
 一 金五円 深井林一
 一 金壹円 戸賀崎和一
 一 金壹円 加藤清一
 一 金壹円 木村春次
 一 金壹円 大島新平
 一 金貳円 武田永太郎
 一 金壹円 深井吉蔵
 一 金五拾銭 高橋圭蔵
 一 金壹円 後藤和助
 一 金貳円 深井清吉

外地勤務

昭和十五年五月二十五日

現役勤務中動員

下令

同六月日

出發

餞別控

一 金貳円也

鈴木まぢ

一 金拾円也 堀口貞三
 一 金五円也 曷川義光
 一 金五円也 深井宗三
 一 金貳円也 同 叔母様
 一 金貳円也 曷川母様
 一 金貳円五拾銭也 深井清吉
 一 金壹円也 深井吉蔵
 一 金壹円也 濱田庄次郎
 一 金壹円也 高橋音蔵

一 金壹円五拾銭

粕壁葉草試験所
田村良修

同所

猪飼とも

井上直

一 金壹円也

栗原文左衛門

一 金貳円也

鈴木長蔵

一 金式田也 全 叔母

一 金式田也 深井光蔵

一 金式田也 深井悌

一 金壹田也 濱田利左衛門

一 葉書 後藤和助

式拾五枚

露宮の歌

勝つてくるぞと勇ましく
誓つて国を出たからは
手柄立てずに死なれよか
進軍ラツパきくたびに
臉に浮かぶ旗の波

おわりに

昨年十二月初旬から始めた祝儀控帳の整理はようやく終わりました。
苦勞も多かったが勉強になり、江戸時代の貨幣制度や仕来り、織物の名称などと見聞が広くなりました。

乳児の死亡率の高かった昔は、五十日・百日と成長すること自体が喜びで、この日は餅や赤飯などを近所や知人に配つて子供の成長を知らせました。

記録の内には七五三の振る舞いといった大盤振る舞いがみられる。それもこうした喜びの表れでしょう。

誤読も多々あると思いますが追いつ追いつ勉強して修正していきたい。
虫喰いや難解の箇所は□で示しました。

平成三年春

三月吉日

深井滋男

参考にした本

起源の謎 樋口清之監修 光文書院
江戸雑稿 岩井良衛著 毎日新聞社
広辞苑 新村出編 岩波書店
歴史研究第二六九〜二七二号
古文書解読講座 新人物往来社
第七十七〜八十回

参考（祝儀の始まり）

寛延（一七四八〜五〇）以後書かれた常陸（したち・茨城県）地方のある庄屋の古今比較論より

三月の雛祭りも昔はしなかつたので、節句のことも覚えがないが、延享（一七四四〜四七）ごろから紙で作った雛を十二文ぐらいで買い求めて初孫の節句にやるようになった。二女からはやらない。

端午の時も同様で、初孫へ紙小旗と唱えて年代紙五枚へ絵を判で刷つたもの二十四

文から六十四文ぐらいで求めてやるが、そのほかの節句には礼にも出ない。

髪置(かみおき)・袴着(はかまぎ)・帯解(おびとき)の祝いなど昔はなかったが、延喜ころ潮来(いたこ)あたりから始まって帯解の祝儀などをするようになった。

はじめは友人などから海老(えび)などをやったが、今は帯一筋に魚鳥の類を添えてやる。

もつとも袴着は今もつてやらない。

(近世農民生活史 児玉幸多著 吉川弘文館)

本文語句の説明

一頁下段 1行目 樽酒を買う代金(結婚・転宅などの時にいうことが多い)。

樽代の略。

〃 後3行目 青梅(おうめ) 〃青梅産の織物。

二頁上段後4行目 寫↓寫↓縞 縞織物の筋に似た模様(縞から)

〃 下段 5行目 八丈(はちじょう) 〃八丈島から産する平織りの絹布。黄八丈・鳶八丈

鳶八丈

三頁下段 4行目 小立(こたち) 〃小立↓小裁。生児から四才位までの着物などの裁ち方。一つ身・三つ身の類。

七頁下段 8行目 棧留(さんとめ) 〃棧留縞。もとサントメ(インド)から渡来

した縞のある綿織物。表面は滑らかで光沢がある。

一一頁下段 3行目 乳付親(ちつけおや) 〃↓乳合(ちちあわせ) 生まれた児に、

まず他人の乳を飲ませる風習。その乳をあたえた人。

一九頁下段 1行目 硯蓋(すずりぶた) 〃口取り肴などを祝儀の席で盛る広蓋の類。

またその盛った肴。

〃 4行目 取肴(とりざかな) 〃各自に盛り合わせてとる酒の肴。

一九頁下段後2行目 なまりぶし 〃蒸したかつおの肉を半乾にした食品。なまぶし。

二二頁下段後2行目 菖蒲刀(しょうぶがたな) 〃シヨウブの葉を束ねて作った刀。

男児の初節句に飾った木刀。

二三頁上段 2行目 紐直(ひもなおし) 〃帯解きに同じ。子供がはじめて帯を用いる祝いの儀式。男児は五才から九才、女兒は七才の十一月

吉日を選んで行う

〃 下段 1行目 本裁(ほんだち) 〃おおだち(大裁)。

二三頁下段 7行目 上代染(じょうだいぞめ) 〃京都高台寺の格天井(こうてんじ

よう) 模様を模した染模様。太閤染。高台寺染。

二七頁上段後2行目 鳥目(ちようもく) 〃中に孔があつて、その形が鳥の目に似て

いることから銭の異称。

三一頁下段 6行目 南鐮(なんりょう) 〃江戸時代の貨幣。二朱判銀のこと。

七六頁上段 8行目 紅粉(べにこ) 〃化粧用として唇、頬、爪などの着色。

七六頁下段 5行目 花元結(はなもとゆい) 〃美しく彩色したもとゆい。

九七頁上段後1行目 島代(台)(しまだい) 〃洲浜(すはま) 台の上に松・竹・梅に

慰(じよう)・姥(うば)や鶴・亀など形を配したもの。

婚礼・饗応(きようおう)などに飾りものとして用いる。

(引用・広辞苑)